

## 論文審査の結果の要旨および担当者

|      |       |   |
|------|-------|---|
| 報告番号 | ※ 甲 第 | 号 |
|------|-------|---|

氏 名 Inu Isnaeni Sidiq

論 文 題 目

スンダ語の受身構文について  
日本語の「～（ら）れる」との対照を通じて

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 佐久間淳一

委員 名古屋大学教授 町田 健

委員 名古屋大学教授 齋藤文俊

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の概要】

本論文は、話者人口約 2700 万人を数えるインドネシアのスンダ語の受け身構文について包括的な記述を行うとともに、日本語の「(ら)れる」による受け身構文との対照を通して、その統語的、意味的特徴を明らかにし、スンダ語における自他動詞の対応について考察を試みようとするものである。

まず、論者は、序章において、スンダ語の受け身構文には、接頭辞 di-を伴う動詞によって作られる di-動詞構文と接頭辞 ka-を伴う動詞によって作られる ka-動詞構文があること、そして、スンダ語では受け身構文が使用される頻度が高いことを指摘する。また、この二つの受け身構文は、それぞれ異なる機能を持っているが、その詳細については、十分研究されていないと述べている。

第1章では、二つの受け身構文のうち di-動詞構文を取り上げ、この構文が、能動文に対応する典型的な受動の意味を表すと同時に、可能や義務、禁止、願望といったモダリティ表現や難易表現と共起することから、命令や丁寧さといった派生的な意味を表すことができること、そして、この点は、日本語の「(ら)れる」を用いた受け身構文にはない特徴であることを指摘した。また、日本語では、無生物は主語に立ちにくいいため、能動文の目的語が無生物の場合、必ずしも受け身構文が用いられるわけではないが、スンダ語では、主語に立つものに有生性の制約がないため、文脈上、被動作主に焦点が当てられた場合、容易に受け身構文を使うことができると述べている。

第2章では、もう一つの受け身構文である ka-動詞構文を取り上げ、この構文が、従来指摘されてきたような非意図的な行為だけでなく、結果状態の陳述や自発、可能といった意味を表すことができることを指摘した。具体的にどの意味を表すかは、各文の動詞の意味によって異なる。また、di-動詞構文は基本的に対応する能動文を持っているのに対し、ka-動詞構文には、対応する能動文が存在しない場合もある。日本語の「(ら)れる」を用いた受け身構文との関係においては、ka-動詞構文が自発や可能を表す場合には対応するが、非意図的な行為や結果状態の陳述を表す場合、受け身以外の表現が対応することが多いと指摘している。逆に、日本語の「(ら)れる」が可能や自発を表す場合、それが、スンダ語の ka-動詞構文にいつでも対応するわけではない。

第3章では、能動、受動の対立と深く関わるスンダ語の自動詞と他動詞の対立について、自他動詞の分類を行うとともに、両者の対応関係について考察した。スンダ語には多様な接辞が存在し、基本動詞から各種の派生動詞を容易に形成することができるが、基本他動詞と接頭辞 ka-を伴う派生自動詞の対応が、スンダ語の自他動詞の対応における主要なパターンの一つであり、スンダ語の動詞組織において、受け身構文が重要な役割を果たしていることを指摘した。

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の評価】

スンダ語は話者人口が 2700 万人以上と、世界的に見て大きな言語であるにもかかわらず、その研究は進んでいない。これは、スンダ語が話されているインドネシアでは、非常に多くの言語が話されており、その一方で、半ば人工的な言語であるインドネシア語が共通語として使用されていることが背景にある。しかし、大きな言語であるだけに、十分に記述すらされていない現状では、その用法に大きな変化が生じやすく、何が正しい用法なのかが決められない状況になってしまっている。

スンダ語をめぐるこうした状況を踏まえるならば、本研究が、受け身構文という限られた領域ではあっても、動詞組織のあり方と深いかかわりを持つ統語論の中核的な領域で、先行研究が限られる中、包括的な記述を成し遂げたことは、それ自体、高く評価することができる。また、その記述の内容も、先行研究のように、受け身構文の単なる分類にとどまらず、受け身構文が命令や丁寧さを表したり、可能や自発の意味で使えたりといった、他の言語でも起こりそうな一般言語学的事実を引き出して、その点も評価できる。このような記述が、スンダ語のような大きな言語には当然存在するはずの規範的な文法書を今後作っていく上で、重要な一歩となることは間違いない。

一方、日本語の「(ら)れる」を用いた受け身表現との対照においても、単に似ている、似ていないにとどまらず、似ていない場合には、なぜ両言語が異なっているのか、情報構造上の項の配置や項の有生性等に言及して、説得力のある説明を展開している点も評価される。

もちろん、細かく言えば、記述が不十分な点も少なくないし、第 3 章で論者が企図した自他対応に関する動詞の再分類については、自他動詞の有対、無対の別には着目しているものの、スンダ語に数多く存在する接辞との関係が整理しきれておらず、改善の余地は多々あると言わざるを得ない。

ka-動詞構文は非意図的な行為を表わすとされ、そのこと自体は従来から指摘されてきたことではあるが、一般言語学的な観点から見て、なぜ ka-動詞構文が非意図的な行為を表すことができるのか、といった点に言及がなかったことも惜まれる。

また、インドネシア語や、スンダ語と並んでインドネシアの有力な言語であるジャワ語についてはほとんど言及されていないが、インドネシアの言語状況を考えれば、これらの言語についても言及があった方が、より本論文の価値を高めたと思われる。

しかし、スンダ語研究の現状では、言語事実の記述を着実に進めることが何よりも重要であり、これらの問題は、本論文の本質的な価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、一致して、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断した。